

ポーズが日本語母語話者の評価に与える影響についての 一考察

韓国人日本語学習者のスピーチより

高村 めぐみ[†]

【要旨】本稿では、韓国人学習者のスピーチの中から、音声面でマイナス評価されたスピーチについて、聴覚印象および音響音声学上、ポーズの点でどのような特徴があるか、また、その特徴が評価の要因になっているかを考察した。さらに、マイナスに評価されたスピーチの中で、評価に影響を与えたと推測されるポーズを母語話者と同等の時間長に加工したデータは、評価が上がるかを調べた。

その結果、文末、接続助詞、トピックマーカの「は」、および連体修飾語の後のポーズを調整した場合、より高い評価が得られるようになることが分かった。このことから、ポーズの時間長のみを改善することで、母語話者評価が高くなる可能性があることが示唆された。

キーワード： 韓国人学習者、スピーチ、母語話者評価、ポーズ、発話速度

1. はじめに

日本語教育において、スピーチ、プレゼンテーションといった独話での口頭発表は比較的良好に行われる活動の一つである。しかし、聴取者である日本語母語話者に「言っていることは分かるが聞きにくい」、「自然な感じではないので、聞いていると疲れる」などと評価されることが少なくない。

母語話者が学習者の日本語の発話を評価する際の基準には、アクセント、イントネーション、リズムなどの韻律的要素¹や、単音の正確さなど様々な要素が影響を及ぼしていると考えられる。佐藤(1995)は、母語話者が学習者の発話を評価する際、「単音より韻律の影響の方が大きく、高さ・長さ・強さの3つの韻律的要素のうちでは、高さが1番評価に影響を与える」と述べている。一方、独立行政法人国際交流基金(2004: 3-4)では、「いいスピーチ」の要素として、1.大きい声、2.ゆっくり、3.ポーズ、の3つをあげており、高さ・長さ・強さよりも、速さとポーズの重要性を述べている。もちろん、理想的には、韻律を構成する全ての要素が聴取者によって聞きやすくなるように指導をすれば良いわけだが、日本語学習者にとってはそう容易なことではない。

日本語教育の現場では、石崎(2004)が「学習者にとってピッチの習得は容易ではなく、時間がかかる」と、ピッチ習得の困難さを述べている。さらに、中川(2003)が「日本語の学習者に対してアクセント、イントネーションの指導を行った結果、アクセントの学習効果は顕著ではなく、イント

[†]立教大学ランゲージセンター

¹本稿では韻律的要素を「母音や子音+母音の連鎖に寄生してはじめて成り立つような性質のもの。非分節音とほぼ同義で、アクセント、イントネーション、ポーズ、リズム、発話速度、音節等を指すもの」(城生、1998: 11-12)と定義する。

ネーションについても母語に類似したピッチ曲線が描かれていた」と述べているように、学習効果が著しくないケースもある。

中でも韓国人学習者にとって、日本語は文法構造や語彙が韓国語と近いと、他の母語話者よりこれらの点では習得しやすい言語であると言えるかもしれない。だが、発音についてはその問題点を指摘する研究も少なくない。例えば、関(1989)は「韓国語のアクセントにおける声の高低変化は日本語より顕著でないため、日本語アクセントの特徴である高低変化を調整するのは極めて困難であると予測される」と述べている。

以上のことから、ピッチの習得を苦とする学習者に対してピッチの指導をしても、思ったような効果が表れない可能性が予想できる。むしろ、ピッチ以外の韻律的要素であるリズム、ポーズ、速さなどの中から、それぞれの学習者が習得しやすい要素を指導したほうが、現実的で効率的である。そして、結果的には、それが母語話者からプラス評価を得る近道になると言えるだろう。

本稿では、「ピッチ以外のプロソディー要素²であり、かつ比較的コントロールが容易なポーズ」(石崎, 2007: 136)と、「ポーズの頻度以外で、聞き手が流暢さの評価の指標とする発話速度³」(田島, 2005)に焦点をあて、学習者のスピーチの特徴および日本語母語話者の評価に与える影響について研究を行った。

2. 先行研究

まず、学習者の日本語のポーズの特徴について、石崎(2005)は「初級学習者の音読時のポーズ、および発話節⁴は日本語母語話者より短い。また、母語話者が置かない文節中にポーズを置いたり、逆に母語話者が必ず置く文末にポーズが欠落していたり、時間長が不十分な例がみられる」と、様々な相違を述べている。

日本語母語話者による評価については、平野他(2006)が全体的印象、アクセント、リズム、ポーズ、イントネーションの5項目の母語話者の評価と音響的特徴の関係について、「全体的印象との相関は、イントネーション、リズム、アクセント、ポーズの順に高かった」と、全体的印象とポーズの相関は低いと述べているが、一方で、学習者のポーズの評価について、佐藤(2004)は「日本人が外国人の日本語音声の評価する際、音の長さよりもポーズを母語話者に近づけたほうが、評価が上だった」とポーズの重要性を述べている。

ポーズと速さに注目した研究には、高村(2009b)が日本語母語話者に聞きやすいと評価された学習者2名のスピーチと母語話者のスピーチの共通点を探った結果、「文末、接続助詞の後に長いポーズが表れることと、発話速度および調音速度に共通点が見られた。」と述べたものがある。さらに、高村(2009a)が日本語母語話者および聞きやすいと評価された学習者のスピーチと、聞きにくいと評価されたスピーチの相違点を分析した結果、「母語話者が区切らない箇所でのポーズの挿入が「ポーズの時間が長くて回数が多い」という印象を、さらに、発話速度および調音速度が速く、1つの発話節に含まれる平均モーラ数の多いことが「速すぎて聞きにくい」という印象を母語話者に与えている」と述べたものがある。他にも、鈴木他(2005)は、ニュースの音読を資料に「瞬間速度⁵が速くても十分なポーズをとって平均速度⁶を遅くすれば、聞きやすい音声になる」と述べている。一方、中村(1997)は「句の発話に要する時間が長いほど、あるいは、句の内容の拍数が多いほど、取られ

²本稿での「韻律的要素」(脚注1参照)と同義。

³発話速度はポーズの時間長を含めた速さのこと(speech rate)である。それに対してポーズの時間を除外した速さを調音速度(articulation rate)と呼ぶ。

⁴杉藤(1987: 55)の用語で、「ポーズとポーズの間に挟まれた発話部分」と定義されている。

⁵本稿では調音速度のことを指す。

⁶本稿では発話速度のことを指す。

る間は長い」と述べている。また、石崎(2007)では「調音速度が遅い時より普通の時のほうが評価が高く、調音速度が普通の時「なめらかさ」で母語話者的なポーズパターンの評価が高くなる」と述べている。

以上、先行研究では学習者および日本語母語話者のポーズと速さの特徴や評価についての言及はあるが、母語話者にマイナスの評価を及ぼす特徴を変えることで、評価も変わるのかについては、佐藤(2004)以外に具体的な記述は見られない。但し、佐藤(2004)の研究では、発話速度や調音速度は考慮せず、外国人学習者のポーズを日本語母語話者のポーズの時間長に変えてしまっている。「調音速度に差がある場合、一定時間当たりのポーズ数、時間長が同じであっても、調音速度が遅いもののほうが相対的な頻度、時間長が低く算出される」(石崎 2007: 27)ことを考えると、方法論の部分で疑問が残る。

3. マイナス評価を引き起こす要因の調整による評価の変化

本研究では、母語話者にマイナスの評価をされたスピーチを資料に、マイナス評価の要因になったと考えられるポーズと発話速度のみを調整した場合⁷、評価が高くなるのかを明らかにすることを目的に実験を行う。

3.1 資料

マイナスに評価された学習者のスピーチ資料は高村(2009a)で使用したものである。資料は、韓国女性学習者5名による日本語でのスピーチ「外国人による日本語弁論大会」を録音したデジタル音声をweb上からダウンロードしたものである。サンプリングレートは22.05kHz、実働サンプリングレートは11.025kHzである。学習者の日本語能力は中上級～上級で、5名とも録音当時は日本の大学に通っていた。5つのスピーチを母語話者8名に聞いてもらい、その中から速さ、ポーズに関してマイナスのコメントが1番多かったKHのスピーチ⁸を資料として扱っている。また、KHのポーズのどこが母語話者と異なるのかを調べるために、比較材料として母語話者JMによるKHのスピーチの暗唱(以下JM/H)⁹と母語話者JOによるKHのスピーチの暗唱(以下JO/H)を資料として用いた。JM、JOの録音はaudio-technicaの単一指向性のエレクトレットコンデンサーマイクAT9820XをSONY VAIO VGN-NR72B(Windows Vista)につなげ、CoolEdit2000を使って行った。ファイル保存時のサンプリングレートは44.1kHz、実働サンプリングレートは22.05kHzである。また、母語話者だけでなく、5名の韓国女性学習者のスピーチの中からプラスのコメントが1番多かったKCのスピーチも資料として用いた。以上、～の資料の発話節とポーズの時間長を計測し、比較した(表1参照)。

さて、発話節とポーズの時間長を計測する際に、発話節とポーズを画定しなければならないが、聴覚印象をもとに画定した「知覚的ポーズ¹⁰」と、Praat、SUGI-Speech、Multi-Speechといった音声解析ソフトで観察し、原波形やサウンドスペクトログラムをもとに画定した「音響的ポーズ」のどちらを採用するかという問題がある。それは両者が必ずしも1対1対応をしていないからである。本研究では、まず3名のポーズ認定者である母語話者に「どこで切れ目を感じるか」を判断する知

⁷比較資料に自然言語音は使わなかったのは、韻律を構成する各要素は他の韻律要素と複合的に連動しているため、ポーズのみを調整して発話することは極めて困難だと考えたからである。本稿ではポーズとそれに伴って変動する発話速度に焦点をあてた。

⁸スピーチの内容は、韓国の教育における問題を身近な例を挙げながら指摘したものである。

⁹JM、JOにはKHのスピーチを文字起こししたメモを渡し、暗記をしてもらった。そして、「目の前の聴衆に向かってスピーチをしている場面を想定して話してください」と指示を出して、録音を行った。

¹⁰後述の「音響的ポーズ」と共に峯松他(1995)の用語である。

覚的ポーズの認定をしてもらった。知覚的ポーズの認定は、全てのポーズについて3名の意見が一致したわけではなかったが、2名以上がポーズと認定した箇所を「知覚的ポーズ」と画定した。次に、SUGI-SpeechAnalyzer1.07を用いて、知覚的ポーズおよび発話節の時間長計測を行った。さらに、知覚的ポーズの時間長を計測した結果、無音区間(促音と無声子音は除く)が「相対ポーズ値¹¹」で1拍以上認められる箇所を「音響的ポーズ」と画定し、これを「ポーズ」と定義した。

分析の結果、マイナスに評価されたKHの特徴として、以下の4点が示唆された。

- 1.文末のポーズは、プラス評価のスピーチ及び母語話者の暗唱より短い。同様に、接続助詞、トピックの「は」の後のポーズもない、あるいは短い。
- 2.母語話者の暗唱には見られない連体修飾と被修飾語の間にポーズが出現している。
- 3.母語話者の暗唱には見られる接続詞の後の短めのポーズが出現していない。
- 4.マイナス評価のスピーチは発話速度、調音速度ともに、母語話者の暗唱やプラス評価のスピーチに比べて速い。

表1：各スピーチの全長、ポーズ頻度等

	KH	JM/H	JO/H	KC
全長(ポーズ頻度)	41016ms(17)	48977ms(23)	50001ms(22)	41660ms(20)
1拍あたり平均値	118ms	132ms	133ms	136ms
発話速度	6.2 拍/秒	5.2 拍/秒	5.1 拍/秒	5.3 拍/秒
調音速度	8.9 拍/秒	7.9 拍/秒	7.8 拍/秒	7.3 拍/秒

3.2 元データと加工データの作成

以上の結果に基づいて、KHのスピーチを加工する。具体的には、マイナスに評価されたKHの資料(以下「元データ」と、マイナスの要因になったと推測されるKHのポーズをJM/Hの暗唱を参考に調整した資料(以下「加工データ」)の2種類である。加工データを作成するにあたり、JO/HではなくJM/Hの計測値を参考にしたのは、JO/Hより若干ではあるが発話速度、調音速度がKHに近い数値だったからである(表1参照)。

さて、元データのポーズを調整する際、母語話者のポーズの時間長をそのまま加工データに当てはめることは出来ない。それは、「調音速度に差がある場合、一定時間当たりのポーズ数、時間長が同じであっても、調音速度が遅いもののほうが相対的な頻度、時間長が低く算出される」(石崎,2007:27)からである。つまり、絶対値を用いることは発話速度の影響を無視することにつながる。そこで、3.1と同様、相対ポーズ値によって調整した(表2参照)。なお、ポーズの時間長を調整したため、元データと加工データでは調音速度は同じであるが、発話速度は変わっている。

具体的には、KHの発話は母語話者の発話に比べて(1)文末のポーズの時間長が短すぎる(以下「文末」)、(2)接続助詞の後のポーズの時間長が短すぎる(以下「接続助詞」)、(3)トピックの「は」の後のポーズの時間長が短すぎる(以下「「は」短」)、(4)トピックの「は」の後にポーズがない(以下「「は」無」)、(5)連体修飾の後にポーズがある(以下「連体修飾」)、(6)接続詞の後にポーズがない(以下「接続詞」)という特徴があり、これらがマイナスに評価される一因になっている可能性がある。以上の

¹¹相対ポーズ値とは大野他(1996)が提唱した用語で、ポーズの時間長を発話節内の1拍の時間長で割り、ポーズを拍で表したものである。大野(*ibid.*)では、発話節の文頭と文末の1音節あたりの時間長を比べると文末部の発話速度のほうが安定しているため、文末部の発話速度のみを用いて相対ポーズ値を算出している。しかし、本研究ではKHの文末に母音の引き延ばしが見られ、それがマイナス評価に影響を及ぼしていた(高村,2009a)ため、発話節全体から相対ポーズ値を算出した。

6点に一連のスピーチを通して聞くための(7)全体を加えた計7種類の資料について、それぞれ元データと加工データを準備した(表3)。

表2：元データと加工データのポーズ実測値と相対ポーズ

		元		加工	
		ポーズ (ms)	相対ポーズ	ポーズ (ms)	JMの 相対ポーズ
12	実際韓国には	443	3.8	520	4.4
13	水泳を習ったことがない人	589	5.0	696	5.9
14	泳げない人がたくさんいます	860	7.3	1107	9.4
15	私もその中の1人です	1544	13.1	1948	16.5

表3：ポーズの表れる位置と時間長

		節	元データ		加工データ	
			P	相対P	P	相対P
(1)文末	実際韓国には水泳を習ったことがない人、泳げない人がたくさんいます / 私もその中の1人です	55	860	7.3	1107	9.4
(2)接続助詞	もちろん公営のプールならあちこちにありますので / そこにかよって習おうと思えば習うことができます	51	557	4.7	663	5.6
(3)「は」短	実際韓国には / 水泳を習ったことがない人、泳げない人がたくさんいます	41	443	3.8	520	4.4
(4)「は」無	韓国の学校には / 普通プールがありません	23	0	0	403	3.4
(5)連体修飾	しかし学校に必ずプールがある / 日本と比べてみれば自然にプールという物に接する機会が少なくなってしまいます	62	120	1.0	0	0
(6)接続詞	ですから / 学校で水泳を習うことができません	25	0	0	364	3.1

節=発話節(拍数)、P=ポーズ(ms)、相対P=相対ポーズ値(拍)を表わす。

(7)全体は、元データが全長41016ms、うち発話節28657ms(69.9%)、ポーズ12359ms(30.1%)だったが、(1)~(6)の計6か所のポーズを母語話者に近付けた加工データでは全長42875ms、うち発話節28564ms¹²(66.6%)、ポーズ14311ms(33.4%)になっている(表4)。よって、発話節とポーズの割合はJM/Hの割合(66.1%、33.9%)とほぼ同値になったといえる。また、3.1の資料の選定時に出た「発話が速い」「急いでいる感じがする」というコメントを受けて、本稿では発話節の速度はそのままにし、ポーズの時間長のみを調整することで発話速度を遅く加工した。発話速度は、加工データのほうが時間長の長いポーズが多いため、元データ6.2拍/ms、加工データ5.9拍/msで、加工データのほうが遅

¹²元データで「韓国の学校には/普通プールがありません」のポーズは1相対ポーズに満たなかった(93ms)ため、ポーズとは認めず発話節として計測した(表：3-(4)「は」(無))。だが、加工データではポーズを挿入して計測したため発話節全体で見ると、元データよりも加工データの方が、発話節が93ms短くなっている。

くなっている。

表 4：発話節とポーズの時間長の平均と割合、発話速度

	元データ	加工データ
全長、ポーズ頻度	41016ms (100%)、17 回	42875ms (100%)、18 回
発話節/ポーズ	28657ms (69.9%)/12359ms (30.1%)	28564ms (66.6%)/14311ms (33.4%)
発話速度	6.2 拍/秒	5.9 拍/秒

3.3 元データと加工データの評価

母語話者による元データと加工データ、それぞれの評価を行った。公のスピーチ大会では日本語教育関係者のみならず一般社会人が審査員や観客として参加することも多い。だが、学習者の日本語に触れる機会が全くない人も聴取協力に加わってもらいと、協力者内で評価に大きな差が出る可能性がある。そこで、本稿では、日常生活で学習者の話す日本語に接する機会がある一般社会人に限定して、20 名に協力を依頼した。

評価は 聞きやすさ、 流暢さ、 上手さを 5 件法で判定した。評価項目は、石崎(2007)¹³を参考にして作成した。 聞きやすさは受容性の評価として、 流暢さは言語能力を測る評価として、上手さは総合的な評価としての項目である。それぞれの項目は、「 聞きやすさ」を相手の話をそのまま正確に理解しやすいこと(村松, 2005)、「 流暢さ」を日本語母語話者のようにスムーズに、簡単に、努力しないで言語を使用できること(渡部, 2008)¹⁴、「 上手さ」を発話が明確、明瞭であること(磯, 2001)¹⁵と定義した。

聴取実験協力者 20 名のうち、半数は(1)元データ (1)加工データ、(2)元データ (2)加工データ...の順に、残りの半数は(1)加工データ (1)元データ、(2)加工データ (2)元データ...の順に資料を聞き、1 度で評価するよう依頼した。資料を繰り返し何度も聞かず、1 度だけ聞いて評価するように指示したのは、スピーチ大会等では、審査の時間が限られていることもあり、何度も聞いて評価することは稀だと考えたからである。なお、聴取実験協力者には、今回の実験ではスピーチの内容、構成等は評価対象外であることを前もって告げておいた。再生は聴取者自身で行った。

時間長の加工には SUGI Speech Analyzer1.07 を使った。ポーズ挿入後の発話節末尾と開始部分は自然に聞こえるよう Wave Surfer8.4.2.9 を使用してフェイドイン、フェイドアウトを行った。 t 検定には SPSS 15.0J を使った。

3.4 結果

元データと加工データの評価の平均値、標準偏差、 t 値(対応のある t 検定)を表 5 および図 1 に示す。

聞きやすさは、(1)文末($t=3.20, p<.01$)、(2)接続助詞($t=2.13, p<.05$)、(3)「は」短($t=3.33, p<.01$)、(4)「は」無($t=2.10, p<.05$)、(5)連体修飾($t=2.52, p<.05$)で有意だった。流暢さは、(1)文末($t=2.52, p<.05$)、(4)「は」無($t=3.24, p<.01$)で有意だった。上手さは、(1)文末($t=3.94, p<.01$)、(2)接続助詞($t=2.37, p<.05$)、(4)「は」無($t=3.91, p<.01$)、(4)連体修飾($t=2.35, p<.05$)、(7)全体($t=2.37, p<.05$)で有意だった。

¹³石崎(2007)では、学習者の音読を日本語母語話者が評価する際の評価項目に、総合的な評価として 上手さ、受容性の評価として わかりやすさ 苛々、言語能力を測る評価として なめらかさ 速さの 5 項目をあげている。

¹⁴原文では「早さ」(原文のまま引用)も流暢さの定義に含めているが、本研究ではポーズの時間長を操作することで発話速度を変えているため、速さは定義から除いた。

¹⁵原文では話の内容、言語表現の正確さなど音声以外の項目も評価に含む。

表5：元データと加工データの各評価の平均値、標準偏差(SD)、*t* 値

	元データ		加工データ		<i>t</i> 値
	平均値	SD 値	平均値	SD 値	
(1)文末	2.80	.62	3.15	.75	3.20 **
	3.05	.89	3.30	.80	2.52 *
	2.90	.72	3.35	.75	3.94 **
(2)接続助詞	2.75	.79	3.25	.85	2.13 *
	2.95	.60	3.20	.70	2.03
	2.90	.79	3.30	.86	2.37 *
(3)「は」短	2.65	.49	3.10	.64	3.33 **
	3.05	.76	3.30	.73	2.03
	2.85	.49	3.15	.67	2.04
(4)「は」無	3.40	.86	3.75	.77	2.10 *
	3.15	.91	3.70	.64	3.24 **
	3.10	.83	3.80	.68	3.91 **
(5)連体修飾	2.90	.64	3.15	.75	2.52 *
	3.05	.51	3.30	.57	2.03
	2.95	.51	3.25	.72	2.35 *
(6)接続詞	3.00	.56	3.00	.79	0
	3.25	.55	3.25	.79	0
	3.05	.51	3.35	.59	1.83
(7)全体	2.90	.79	3.10	.79	0.70
	2.95	.89	3.25	.72	1.55
	3.00	.86	3.40	.50	2.37 *

平均値=5 点満点、*df*=19、**=*p*<.01、*=*p*<.05、 =聞きやすさ 、 =流暢さ 、 =上手さ

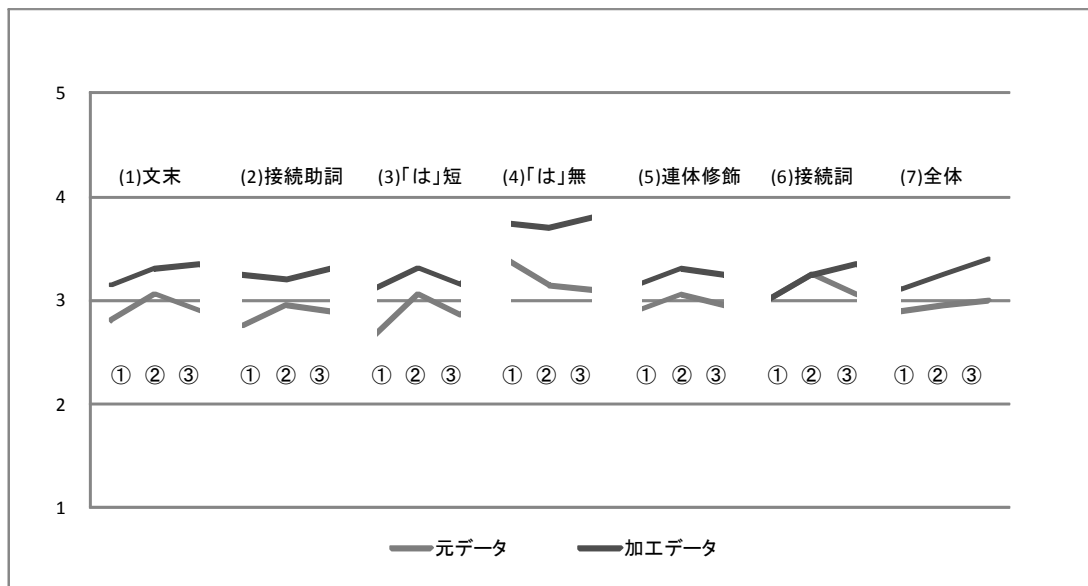


図1：元データと加工データの評価の平均値の比較
 =聞きやすさ 、 =流暢さ 、 =上手さ

3.5 考察

t 検定の結果、聞きやすさは(1)文末、(2)接続助詞、(3)トピックの「は」(短)、(4)トピックの「は」(無)、(5)連体修飾で有意だった。このことから、文末、接続助詞、トピックの「は」の後で、母語話者と同等の十分な時間長のポーズを入れ、反対に連体修飾の後ではポーズがないほうが高い評価を得る可能性があるかと推測できる。但し、連体修飾節と被修飾名詞の関係性によっては異なる結果になる可能性があることを付け加えておく。

流暢さについては(1)文末、(4)トピックの「は」(無)で有意だった。このことから、文末など話の適切な切れ目には十分な時間長のポーズを入れると流暢さの評価がプラスになると推測される。また、トピックの「は」の後にポーズがないと、流暢さの評価にマイナスの影響があると推論できる。

上手さについては(1)文末、(2)接続助詞、(4)トピックの「は」(無)、(5)連体修飾、(7)全体で有意だった。聞きやすさと同様、文末、接続助詞の後では母語話者と同様にポーズの時間長を十分とり、反対に連体修飾の後ではポーズを入れないほうが高い評価が得られると考えられる。さらに、トピックの「は」の後にポーズがないと、上手さの評価にマイナスの影響があると推論できる。また、(7)全体が5%水準で有意であることから、(1)~(5)のポーズの時間長と位置を母語話者と同様に調整することで、プラスに評価されると考えられる。

(6)接続詞については ~ のすべてで有意ではなかった。これは、接続詞の拍数は多くとも4~5拍程度で、それを理解するためにはさほどの時間を必要とはせず、そのため、話し手の言う内容を理解するためのポーズがなくても聞きやすさには影響がなかったためと推論できる。

4. まとめ

以上、母語話者にマイナスに評価されたスピーチについて、ポーズの時間長のみを変えることでプラスの評価が得られるか実験した。その結果、以下のことが示唆された。

1. 文末に母語話者と同程度の十分な時間長のポーズを入れる、あるいはトピックの「は」の後にポーズを挿入することで、聞きやすさ、流暢さ、上手さの3項目の評価が上がる。
2. 接続助詞の後に母語話者と同程度の十分な時間長のポーズを入れる、あるいは連体修飾の後にポーズを入れないことで、聞きやすさ、上手さの2項目の評価が上がる。
3. トピックの「は」の後に母語話者と同程度の十分な時間長のポーズを入れることで、聞きやすさの評価が上がる。
4. 上記の位置に母語話者と同様に十分な時間長をとることで、全体を通して聞いた時、上手さの評価が上がる。
5. 接続詞の後のポーズの有無は母語話者の評価に大きな影響がない。

5. 教育現場への提言

日本語教育の現場では、依然として音声指導が盛んに行われているとは決して言えない。それは、語彙や文法など他にも指導すべきことがあるため時間が割けないという物理的な理由も考えられるが、時々「東京出身ではないため発音、アクセントに自信がない」という教師からの声を耳にすることがある。現在、多くの学校ではスピーチ指導で東京方言を指導しているため、特にアクセント指導に対して、東京出身以外の教師が不安を抱えている可能性がある。そして、その不安が音声指導に対する敬遠につながっているとしたら、一刻も早くアクセント以外の指導方法と、その有益さを示さなければならない。ポーズは、アクセントに比べて地域差が少ないため、ポーズの指導であれば、東京方言を母語としない教師の不安は軽減されるだろう。そして、音声教育に興味を持つ教

師が増え、日本語教育の現場で音声教育が活発に行われるようになることを期待する。

学習者への具体的な指導法だが、まずは、学習者自身が自らのポーズの問題を認識することが必要であると考え。そのためには、聴覚のみならず、音響解析ソフトで学習者と母語話者の発話の波形を示すことにより、ポーズの位置、時間長を視覚的に示すことも効果的だと考える。学習者の中には発話すると同時に自分の発音を内省しても、他者との差異を客観的に把握できない者もいる。そのような学習者には、自分の発音の長所、短所を客観的にとらえる作業が効果的であると考え。

また、中川他(2009)は、「へ」の字型イントネーションを意識させるために、意味と関係した適切な句切り¹⁶を学習者自身に見つけさせる「フレーズ練習」を提言している。中川他は、イントネーションの習得を目標に掲げているため、学習者自身が文章を句切った後で、ピッチの高低差を意識した練習を続けるよう述べているが、本研究の結果から、学習者が意識的に適切な箇所に適切な長さのポーズを入れるだけでも、高い評価を得られるスピーチが出来るようになる可能性が示唆されたと言える。

さらに、杉藤・大山(1990)は、「意味上の区切りとして重要なポーズでは息継ぎがおこなわれ、重要でないポーズでは息継ぎがされない」と述べている。これを援用し、学習者自身がスピーチの練習を行う際は、必ず意味的なまとまりを意識し、そこで息継ぎをするよう指導することが効果的であると考え。また、本研究の結果から、トピックの「は」の後のポーズが聞きやすさに影響があることが示唆されている。つまり、母語話者からプラスの評価を得るためには、文末では息継ぎをとる、トピックの「は」の後では小さくとも区切りを入れる、という指導が有効に働く可能性があるかと推論できる。

6. 今後の課題

今回、ポーズと発話速度が母語話者の評価に与える影響について考えた。今後は、まず調音速度とポーズの関係について調査をすすめる必要がある。先行研究でも先述したように、鈴木他(2005)、中村(1997)が速度とポーズの関係について言及をしているが、学習者のスピーチに特化した場合、両者の間にはどのような関係があるかを探りたい。

また、本稿では韓国語学習者のみを対象としたが、他の言語を母語とする学習者についても調べる必要がある。同時に学習者の日本語レベルによってスピーチの内容、構成が異なるため、評価の基準も変わることが予測される。様々なレベルの学習者の資料を調査する必要がある。

さらに、聴取者を母語話者以外に想定した場合についても検証する必要がある。宇佐美(2001)は、「聞き手を日本人以外に想定したときでもわかりやすく、かつ説得力のある話し方についての研究が必要だ」と述べている。これまでは、日本語母語話者にとって最も親しみ深いと考えられている「日本語ネイティブが話す東京方言」を基準に音声教育が行われてきた。しかし、校内のスピーチ大会等では、聴取者の大半が日本語母語話者でないケースもあり、その場合、たとえ上級、超級の学習者であっても、最も聞きやすい日本語が「日本語ネイティブが話す東京方言」ではない可能性が考えられる。その場合、どの程度、どのような形でスピーチ指導に反映させるべきか、学習者のレベルも含めて考えねばならない。

【参考文献】

石崎晶子(2004)「作文音読における初級学習者のポーズの特徴 英語母語話者 4名の縦断的資料を基に」『第二言語としての日本語の習得研究』7: 26-44

¹⁶中川他(2009)で使っている用語で、「句切り」は「区切れ、区切り」と呼ばれることが多いが、ここでは句=フ

- (2005)「日本語の音読において学習者はどのようにポーズをおくか—英語・フランス語・中国語・韓国語を母語とする学習者と日本語母語話者の比較—」『世界の日本語教育』15：75-89
- (2007)「日本語学習者の音読におけるポーズの特徴、およびポーズ指導の効果」お茶の水女子大学博士論文
- 磯友輝子(2001)「話し手の非言語的行動が「話の上手さ」認知に与える影響 - 発話に伴うジェスチャーに注目して - 」『対人社会心理学研究』1：133-146
- 宇佐美洋(2001)「これからのスピーチ研究 日本語教育の立場から 」『日本語学』20-5：37-47
- 大野眞男・三輪謙二(1996)「朗読におけるポーズと発話速度 「相対ポーズ値」の提唱 」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』6：45-58
- 佐藤友則(1995)「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』5：139-154
- (2004)「ポーズと長さが音声評価に与える影響力の比較 外国人学習者の日本語音声評価において 」『信州大学留学生センター紀要』5：59-68
- 城生佰太郎(1998)『日本語音声科学』サンエデュケーショナル
- 杉藤美代子(1987)「談話におけるポーズの持続時間とその機能」『音声言語』：53-68
- 杉藤美代子・大山玄(1990)「朗読におけるポーズと呼吸 息継ぎのあるポーズと息継ぎのないポーズ」『音声言語』：199-211
- 鈴木淳也・佐川雄二・田中敏光・杉江昇・下山博(2005)「聞きやすい音声におけるポーズ長と話速の関係の分析」『名城大学総合研究所総合学術研究論文集』4：27-36
- 高村めぐみ(2009a)「韓国人日本語学習者の聞きにくいスピーチの特徴についての一考察 ポーズ、速さ、リズムを視点に 」『桜美林言語教育論叢』5：1-16
- (2009b)「聞きやすいスピーチの特徴に関する一考察 ポーズと速さを視点に 」『外国語教育研究』12：3-21
- 田島ますみ(2005)「流暢さを表す指標について 発話速度とポーズ頻度」『中央学院大学人間・自然論叢』21：133-155
- 独立行政法人国際交流基金関西国際センター(2004)『初級からのスピーチ 国・文化・社会についてまとめた話をするために 』凡人社
- 中川千恵子(2003)「日本語音声指導法に関する一考察 2種類のプロソディー指導を比較して 」『早稲田大学語学研究所紀要』58：191-212
- 中川千恵子・中村則子・許舜貞(2009)『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』ひつじ書房
- 中村敏枝(1997)「スピーチの内容と「間(ま)」の関係」『日本心理学会第61回大会発表論文集』：107
- 平野宏子・広瀬啓吉・峯松信明・河合剛(2006)「中国語話者の日本語朗読音読の韻律的特徴と母語話者評価」『電子情報通信学会技術研究報告』105-686：23-28
- 峯松信明・片岡嘉孝・中川聖一(1995)「講演調の話し言葉に対する分析」『音声言語情報処理』8：39-46
- 関光準(1989)「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68：175-190
- 村松賢一(2005)『できる教師の「話し方・聞き方」』明治図書
- 渡部倫子(2008)「日本語の流暢さに対する評価にかかわる要因」『留学生教育』13：11-18

レーズを重視するため「句切り」と呼ぶ」と書かれている。

Influence of Pauses on Evaluations by Native Japanese Speakers of Speeches by Korean Students of Japanese

Megumi TAKAMURA[†]

The purpose of this study was to examine negative phonetic grades assigned to speeches by Korean students of Japanese. In particular, the study focused on auditory and acoustic-phonetic characteristics in terms of how they are affected by a pause, and whether such characteristics were used for evaluation by native Japanese speakers. For speeches that received negative evaluations, we edited the length of pauses thought to have affected the speech evaluation so that they were the same length as those made by a native Japanese speaker in order to determine whether the edited data would increase the evaluation grade.

Higher marks were achieved when pauses were positioned after sentences, conjunctive particles, the topic marker “wa,” and adnominal modifiers. These results indicate that adjusting pause length may increase speech quality as evaluated by native Japanese speakers.

[†]*Language Center*

Rikkyo University

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, 171-8501, Japan

E-mail: takamura@rikkyo.ac.jp